

目次

はじめに〈慣用句の中のカミ〉

5

I ナル神とウム神

9

- 1 古事記の神代語り
- 2 日本書紀の神代編成意識
- 3 アマテラス以降の人身神——ウケヒという神事
- 4 ヤホヨロヅの神とは何だったか
- 5 神々のまつられ方——神楽歌の神まつり

II カミ、ヒトになり、ヒト、カミとなる

63

- 6 大国主神をめぐおほくにぬしのかみる神語り
- 7 神々の「ウツシオミ（現身）」

Ⅲ 古代社会の多神信心

- 8 ウカ神と別天の天女あまつをとめ
- 9 カミ、ヒトを求婚よばう
- 10 神の坐所〈ヤシロ・ミヤ、ホコラ〉と家形埴輪

- 11 外来思想の導入と古道（巫術）の排除
 - 12 「神社」という言葉と延喜式「神名帳」
 - 13 和名抄「神霊類」と、タマとオニ
 - 14 生身のカミ〈ホトケ〉、「観音」と「地藏」
 - 15 「成仏」を願う人々
 - 16 もの詣での盛行と巫覡の活動
- 付 「信」の翻訳語〈ウク・タノム・マカス〉と「信ず」の成立まで

はじめに〈慣用句の中のカミ〉

日本人が、普通に、カミ（神）とはどのようなものだとして来ているかを、「神」にかかわる慣用句（ことわざ）の中から少し探ってみよう。

まずは、「正直の頭に神やどる」という諺ことわざから。これは、一定よく知られた諺だと思われるが、今はあまり人気がなく、過去にあった諺という感じのものである。辞書類や諺辞典等を見ると鎌倉時代の説話中の例がすであって、室町期の狂言などでもよく聞かれる、古くて命の長い諺だった。シヨウジキ（↑シャウヂキ）は、呉音よみで、本来は仏典から出た語と見られ、より古くには、浄土教を開いた恵心僧都えしんそうず源信は、「天性、正直なり」（法華験記）などと使われてもいる。以後千年近くにわたり、日本のとくに庶民の一大徳目となって、子ども向きの昔話のテーマになったりもしてきた。

鎌倉期の『十訓抄』という説話集に出る例は、「八幡大菩薩、かたじけなくも、正直の頭に宿らむと誓はせ給ふ」などと、特定の神の名が出るが、以来一般には、特に何神

と意識されるわけでもなく、ともかく加護してくれる神が宿るということで、神様は、そのようなまっすぐで嘘偽りのないヒトを愛でられるのだと、古き良き時代の純朴なこの国の人々は、みな肝に銘じても来たのである。

けれどもまた、「苦しいときの神だのみ」という慣用句もあつて、これは江戸期あたりからのものだと思はれるが、何か窮地に陥つたりすると、ふだんは疎遠にして失礼している神のことも、藁にもすがる思いでふと思ひ出されて、もしかしたら助けてくれるかもと「頼む」というのである。そんなヒトの側の身勝手にも、「捨てる神あれば、拾う神あり」とも言われる神々であるから、「拾ってくれる」場合もあるのかもしれない。他方、「触らぬ神に祟りなし」などとも言われるから、上に立つ一部の人と同様、気まぐれに崇めることもある神には、みだりに近づかないほうがよいと思う人もいたのだろう。ただ、この諺の正否の程はいかかと思われるのは、たとえば、雷神は、何の関係もなく突然落ちてくる（たたる）ことがあるし、もろもろの天災（の神）も、忘れた頃にやってきて、人々を痛めつけ苦しめることがあるからである。

ところで、「捨てる神あれば、拾う神あり」という諺を、国語辞典や諺辞典等で引くと、みな「冷たく見捨てる人がある一方で、また助けてくれる人もあり、人の世はさまざま

だ」といったふうに、「人」の世のことをカミに見立てたものと解説している。「触らぬ神に祟りなし」の場合も、こわもての人を敬遠する意で用いられたりする。カミの意向といっても、結局はヒトの世からの投影のようだし、「神にましますものならば、あはれと思し召せ、神も昔は人ぞかし」（平安期、神歌）というのが、古来の認識でもあった。

神と人との境界は、かなり曖昧なのが古来この列島のありようである。人がこの「国に多に満ちてある」（万葉集）ごとく、神もさわに満ちており、ただし、その個々の姿や気（け）は、人の目にはごくまれにしか現じないのがカミである。

「ことわざ」と言えるのかどうか、昭和後期の著名な演歌歌手の「お客様は神さまです」という言葉が人々の印象に残った。確かにさまざまな客商売の人にとっては、客は、利益（りやく）や恩恵をもたらしてくれ、それによって生きてゆけるのだから、ただの人というより神相当、神社に鎮座している神々よりも、はるかに身近で有難い神様なのだろう。ただ、昨今、客の側に神に成り上がったつもりになる人があって、ともすれば理不尽に「崇（た）る」場合があちらこちらであるようで、日本の神様の変質が憂慮もされる。

あるいはまた、最近のテレビの中の若者から、折々「カミ対応」、ときには「神ってる」などといった造語が聞かれ、それは、人の行為の、常人を超えた無謬性・完璧性を指して

いるようである。カミとは、そのような存在と認識されているらしいが、使われるのは、あくまで人の行為についてである。「神わざ」という言葉と近い感じもあるが、「無謬性・完璧性」というのは、日本古来の神とはすこしズレてきているようにも思える。

とまれ、そのような様々な表現において、半ば自然に出てくる、日本人の神認識の根っこやみなもとが、遠くどのあたりから発し、人々のどんな想いおもや願いに根ざしているのかを、まずは古事記・日本書紀・風土記等々の、いわゆる初期文献の言葉の世界から見てゆくことにしたい。

I
ナル神とウム神

1 古事記の神代語り

古事記は、その序文によると、奈良朝の和銅年間、元明天皇の勅命で民部省の朝臣太安万侶が、稗田阿礼という「語りの舍人（＝語りの造）」の「誦習」していた古事の口語りを、四か月ほどで書き記し、献上したものである。事の始めは、おおよそ三十年ほど遡り、天武天皇が、諸家のもつ帝紀や旧辞に誤りが多く、虚偽が加えられてもいることを憂えて、正実を後世に伝えたいと、阿礼に勅語の帝紀・旧辞を誦習させられたことだった。しかし、事を果たすことなく天武は崩御となり、そのままになっていたのである。

序文に沿えば、現存古事記には、天武の「勅語の旧辞」なるものが含まれているようだが、それがどの部分なのか、一部分なのか、相当の量を占めるのかなど、全く不明である。また、阿礼が、天武以外にどのような人物から誦習を補ったのかといったこともよく分からない（詳細は、小著『古事記 声語りの記』、平凡社、参照）。

しかし、古事記の上・中・下に分かれた、特に神代を語る上巻など、読むほどに、実に見事に整序されており、しかも、その中には、神語とも見える独特のフレーズ（おそら

く「正直の頭に神宿る」のように、千年の口承に堪えて来たかもしれないような——後述）が処々に編み込まれてもいる。一方で、必ずしもヤマト族といった一部族の神語りだったとは思えない混成・融合のありようも、ほの見えるところもある。天武の「勅語の帝紀・旧辞」は、おそらくは中・下巻の皇代の事で、神代は別ではないかなどと漠然と見ているが、ともかく、目下の問題は、その神代の神々のことであつた。

天地の初発の時、高天原に成る神の名は、天之御中主の神、次に、高御産巢日の神、次に、神産巢日の神、此の三柱の神は、並独神と成坐て、身を隠せり。

次に、国稚く、浮ける脂の如くして、クラゲナスダヨヘル時、葦牙の如萌騰る物に因りて成る神の名は、ウマシアシカビヒコチの神、次に、天常立の神、此の二柱の神、亦、並独神と成坐て、身を隠せり。

上の件の五柱の神は、別天つ神。

（「以音」と注のある部分は、カタカナ書きとし、注文は省略して引用）

古事記は、このように記し（語り）始められている。もちろん原文は漢字だけで漢文風

に書き取られているものを、右は、なるべく簡潔に訓み下したものである。本居宣長以降近年まで、様々な読み方が提示されてきたが、どれも、もとの語り口を再現できているかどうかは、結局のところ分からない。古事記の文字づら自体は、語り（誦）を呼び出す「記」であると捉えるなら、極論すれば、その漢字表記を見ながら、直接実感のある現代語で語ってもよいものだろう。

それはそれとして、その古事の「記」は、「高天原」という想像上の天上世界に、神が「成」^{なる}ことから始まっている。「なる」とは、今も普通に、半ば無意識に頻繁に使っている日本語の根幹にある動詞で、この世のあらゆる現象が転々することの、そのままをいう言葉である（小著『原始日本語のおもかげ』5「人とナル、風にナル」、平凡社新書、参照）。

和語の、広い用法をもつ「なる」という動詞にぴったり当てはまる漢語はなくて、「成」は、右の冒頭部分の中では、「独神と成る・物に因りて成る」という場合にはほぼ当てはまるが、最初の、高天原に神が出現することに当てるには、少し意味がずれている。日本書紀は、相当する翻訳表記を「為」あるいは「生」としているし、「物に因りて成る」等に対応する箇所も、「化生・化為」などの二字表記とする場合もある。しかしながら、古事記の表記の方針は、ともかく和語の一単語にはなるべく同一漢字で通すことを原則とし

ていたようでもあり、「なる」には、「成」が当たるとされたのだった。

さて、右の本文の続きは、「次に成る神の名は」として、次々に神世七代として括られる独神や双神（男女一对の神）の、後世からは今一つ意味が明快にならない神名を列ね、最後に、「次に、イザナギの神、次に、妹イザナミの神。」と結んで、次の段に繋いでいる（次段の主役的な神を、前段の末尾に生成させるのは、古事記の神代語り中の語り手法である。後のアマテラス・スサノヲの場合も同様）。

是に、天つ神の諸の命以て、イザナギの命・イザナミの命の二柱の神に詔らし、「是のタダヨヘル国を修理ひ固め成せ」と、天の沼矛を賜ひて、言依せ賜ひき。

故、二柱の神、天の浮橋に立て、其の沼矛を指下して画きませば、塩コヲロコヲロニ画き鳴て、引き上ぐる時に、其の矛の末より垂り落ちし塩、累積りて島と成る。是、オノゴロ島ぞ。

其の島に天降り坐して、天の御柱を見立て、八尋殿を見立てましき。是に、其の妹イザナミの命に、問ひ曰さく、「汝が身は、如何にか成れる」と。答へ白さく「吾が身は、成々て成り、合はぬ処、一処在り」と。爾して、イザナギの命詔らさく、「我が身

は、成々なりなりて成り余れる処一処在り。故、此の吾が身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合はぬ処を刺し塞ふたぎて、国土くにを生成うみなさむと以為おもふ。生うむは奈何いかに」と。イザナミの命、答へ曰しかよさく「然善しかよけむ」……（以下略）

最後の部分に出る「生」には、原本ではあえて「生を訓みてウムと云、下は此に効へ」と訓注が付いている。もしも「なる」という動詞がなかったなら、ここまでの神語りは、成り立たなかったと言つて過言ではないが、以後は、イザナギ（風）・イザナミ（波）双神の、交互にイザない合つて八島国や神々を「生む」語りに展開してゆくのがあった。

ところで、神が「なる」というのと、神を「うむ」というのとは、どう違うだろうか。貴人の「お出でまし」ということを、「おなり」とも言うように、神が「なる」とは、神が出現することである。出現以前のこととは不明だが、ともかく存在していなければ、出てくることもない。そしてその存在がアピールされる（認識され命名される）ことがすめば、もとの在り処あに、「身を隠す」のが原初の神々だった。ただし、イザナギ神のように、「なる」ままに大活躍した後、それなりのところに「鎮しづまる」とされる神もある。他方、「生

「ま」れる神とは、二神の間に「ウミ」成され、その時点から、この世に在り始める神で、その後、身を隠すことはない。

さて、高天原からオノゴロ島（淡路島の南に接してある小島、沼島^ヌ）に天降った二神は、神々より先に、まずは、大八島国^{おほやしまくに}を「生み」成した。具体的には、淡路島に始まり、四国・九州や、対馬・隠岐等の外海の島々、そして、今言う日本海側から見た中国地方から北陸あたりまでをいう「大倭豊秋津島^{おほやまととよあきつしま}」と、瀬戸内の小島等々である。ここで語りの視点は、想像上の高天原から、現実の下界の島々の誕生に移ったのである。しかも瀬戸内海あたりを拠点に、舟で活動する海人族^{あま}の視点が濃厚に反映している。それはともかく、こうして、まずは「国は生み竟^をへ」たとして「更に神を生む^{さう}」ことへと進展した。

故、生める神の名は、大事忍男^{おほことおしを}の神。次に、石土毘古^{いはつちびこ}の神を生み、次に、石巢比売^{いはすひめ}の神を生む。次に、大戸日別^{おほとひわけ}の神を生む。次に、天之吹男^{あめのふきをを}の神を生む。次に、大屋毘古^{おほやびこ}の神を生む。次に、風木津別^{かざもつわけ}之忍男^{おしを}の神を生む。次に、海の神、名は、大綿津見^{おほわたつみ}の神を生む。次に、水戸^{みなと}の神、名は速秋津日子^{はやあきつひこ}の神を生み、次に、妹速秋津比売^{いもはやあきつひめ}の神を生む。

ここで、はじめに生んだ七神は、冒頭に「成つ」た神世七代の神同様、何の神なのか今一つ分かりにくい。「大事忍男神」の「忍」は、シノブ意ではなく「お圧しが強い」などというときのオシで、「大事をなし遂げる男神」あたりの意かと思われたりするが、以下六神は、結局神名の指す意味は模糊ももことしている。しかし、最後の三神のように、あえて、「海の神」の名、「みなと水戸の神」の名と断ことわ（言割）ってあれば、それに即して、語義も推測できる。

さらに、この後に、同様な断りを添える、風の神（名はシナツヒコの神）・木の神（名はククノチの神）・山の神（名は大山津見の神）・野の神（名はカヤノヒメの神、亦の名は野椎のづちの神）という語り方が出てくる。

これらが、後世の読者にも、その理解を助ける言い添えだということは、つまりは、海うみや水戸みなとや、風かぜや木きや山やまや野のが、今に続くいわゆる狭義のヤマト言葉だからである。おそらく、この神語りの本来は、それらを、断らなくても分かる人々のものだったが（右のカタカナの名に傍点を打った音は、風し・木く・草かやの意）、ある時点で、断る必要のある人々の神語りとして取り込まれ誦習された可能性が考えられる。

さて、八島国や、多様な自然現象に即した神々の生成こそが、その出現意義でもあるイザナミ・イザナギ双神のその後は、それぞれが大変な事態を受けて、単独に神を成すことになり、ふたたび、「なる」神語りの展開となった。

まず、生み生みて、その終わりに火の神を生んだイザナミ神は、「ミホト炙かえて病み臥せり」となり、いわば産褥熱の苦しみの中で、吐き戻したり、排泄もままならない状態となったが、その「タグリ（反吐）ニ成る神の名は、金山毘古の神、次いで金山毘売の神」「尿に成る神の名は、ハニヤスビコの神、次いで、ハニヤスビメの神」「次に、尿に成る神の名は、ミツハノメの神、次いで、ワクムスビの神」などと、新たに神々が成ったのだった。

他方、「遂に神避坐し」イザナミ神を痛み泣くイザナギ神の涙には、泣沢女の神が成った。そして悲しみと怒りにまかせてわが子火の神カグツチの頸を、十拳の剣で切ったところ、飛び散りあちこちに付着した血からは、八柱もの神が成った。さらに、妹を慕うあまり黄泉国まで追いつくが、連れ戻すことは叶わず、黄泉族の追撃からようやくのことで逃げ戻り、「吾は、イナシコメシコメキ穢き国に到りて在りケリ。故、吾は、御身の禊為む」と、まずは、身につけた杖・帯・衣・冠・手纏等々を投げ棄てると、それらは十二の神に

成った。そのまま禊ぎ（水削ぎ）の水に入り、水の底や中や上などで、くまなく身を滌すすぐごとに、七の神が成った。そして、最後には、

是こゝに、左の御目みめを洗へる時に成れる神の名は、天照大御神あまてらすおほみかみ。次に、右の御目を洗へる時に成れる神の名は、月読命つくよみのみこと。次に、御鼻みはなを洗へる時に成れる神の名は、建速須佐之男命たけはやすさのみのみこと。

此の時に、イザナギの命、大きに歡喜よろこびて詔のらさく、「吾は、子を生み、生みて、生みの終みつりに三の貴みこき子を得たり」と。

として、国生み・神生みの營為は、完結する。

ところで、イザナギ神の黄泉よみかえり以後の神々とは、「なる」神であったが、総括しての言挙げは、「生みの終りに」などと「うむ」神としている。同じ「なる」という神であっても、冒頭の高天原「になる」神と、イザナミ神の病臥以後に成った神とでは、その成り方にいささかの異なりがあった。後で成った神々は、みなイザナミ・イザナギという生成神の「身から」分かれ出た物に因よつて、成った神々である。つまり、並なべて言えば、吾が

身から生まれ出たとも言えるということ、右のように、「生み生みて生みの終りに三貴子を得た」という言挙げになつたのだから。

次段に展開してゆく、アマテラスとスサノヲの神語りでは、二神が邪心なく清明な心を明かすために、「各ウケヒて（誓をウケ取り合つて）子を生む」のだが、その際のアマテラス大神の言葉に、「後に（わが）生める、五柱の男子は、物実我が物に困りて成れるが故に、自づから吾が子ぞ。先に生める、三柱の女子は、物実汝が物に困りて成れるが故に、乃ち汝が子ぞ」と、現象としての「成れる」と、行為としての「生める」を使い分けてもいる。

総じて、この国の始まりの神々とは、自づから「なる」もの、そうして成つた神々が、身みずから「うむ」ものとして、いわば、この世で認識され得る、あらゆる現象、そのことであり、この世が続く限り、「なりなり」てゆく現象にそつて、殖え満ちてゆくものだとするのが、古事記冒頭部の神語りであつた。